

2013 年度大阪大谷大学博物館秋季特別展 「スポーツの進化:遊びからオリンピックまで」報告 ―企画者の視点から―

中道厚子, 水鳥寿思

はじめに

大阪大谷大学は 2013 年 9 月 27 日から 11 月 22 日まで、博物館秋季特別展「進化するスポーツーあそびからオリンピックまで」を開催し、944 名（博物館調べ）の見学者を得た。この特別展はスポーツ健康学科が企画を担当し、スポーツの歴史的な進化、あそびがやがてスポーツにそしてオリンピック競技へと高度化していく過程など、スポーツの進化を主軸に展示を行った。本論は、筆者らが初めての「博物館展示企画へのチャレンジ」で得た貴重な体験を記録することで、次の機会が少しでも良くなることを願うものである。

なお、本特別展にあたり、独立行政法人日本スポーツ振興センター秩父宮記念スポーツ博物館の協力ならびに、公益財団法人日本オリンピック委員会と公益財団法人元興寺文化財研究所の後援を頂戴し、協力をいただいた。

1. 大阪大谷大学博物館と秋季特別展

大阪大谷大学（以下、本学）は 1983 年に博物館相当施設と正式認定された博物館を有し、1999 年大谷学園 90 周年記念施設として 5 階建ての新しい博物館を竣工。長らく春と秋の 2 回、特色あるテーマで貴重な資料の展示を行っている。近年、秋季の特別展は、学内の各学部学科が順次その企画にあたっており、2013 年度は人間社会学部スポーツ健康学科の担当であった。

博物館関係者の支援を得ながら、筆者ら 2 名はスポーツ健康学科の博物館運営委員として、前年の 2012 年、教育学部教育学科企画の秋季特別展「こどもの風景ー教科書でたどる「学び」と「遊び」の今むかし」の開催と前後して準備に入った。

2. スポーツ健康学科の企画原案

筆者らは、今回の博物館との連携を大きなチャンスととらえていた。なぜなら 2013 年度は、スポーツ健康学科設立 2 年目にあたり、学外にその存在をアピールする必要があったからである。そのため、学内にある本格的な博物館施設を活用して、学内の学生はもちろん、学外の様々な人々にスポーツ健康学科を知ってもらう機会となり、心に残るような広報効果の高い展示を実現したいと考えた。

平成 2012 年夏、ロンドンオリンピックの余韻が残る中、展示のテーマについて我々が考慮したポイントは、2004 年アテネオリンピック男子体操金メダリストでもあり、博物館運営委員でもある水鳥の存在をアピールすること、2013 年はロンドンオリンピックの翌年であり、2014 年早春にはロシアのソチで冬のオリンピックが開催される狭間を意識して「オリンピック」をキーワードに入れること。さらに、当時開催中であった教育学部のテーマ「こども」と「遊び」を引き継ぐことを意識し、大人から子どもまでが楽しめる内容に

することを目指した。その結果生まれたテーマが「進化するスポーツーあそびからオリンピックまで」である。また、実際の展示形態については、昨今の博物館では、見るだけにとどまらない体験型の展示がさかんに行われていることをふまえてぜひ体験の機会をできるだけたくさん設けた展示にしたいと考えた。

テーマにそった展示の流れとしては、図1のように「あそび」の起源から、昔の遊び・

スポーツー現代の遊び・スポーツーオリンピックーこれからのスポーツのパートを設定し、この流れの中で、見学者にスポーツの進化を体感してもらうことを考えた。この企画案は、11月の学科会議で了承され、スポーツ健康学科の全教員がいずれかのパートを担当し、説明パネル用の文章作成を分担するなどの協力体制を整えていった。

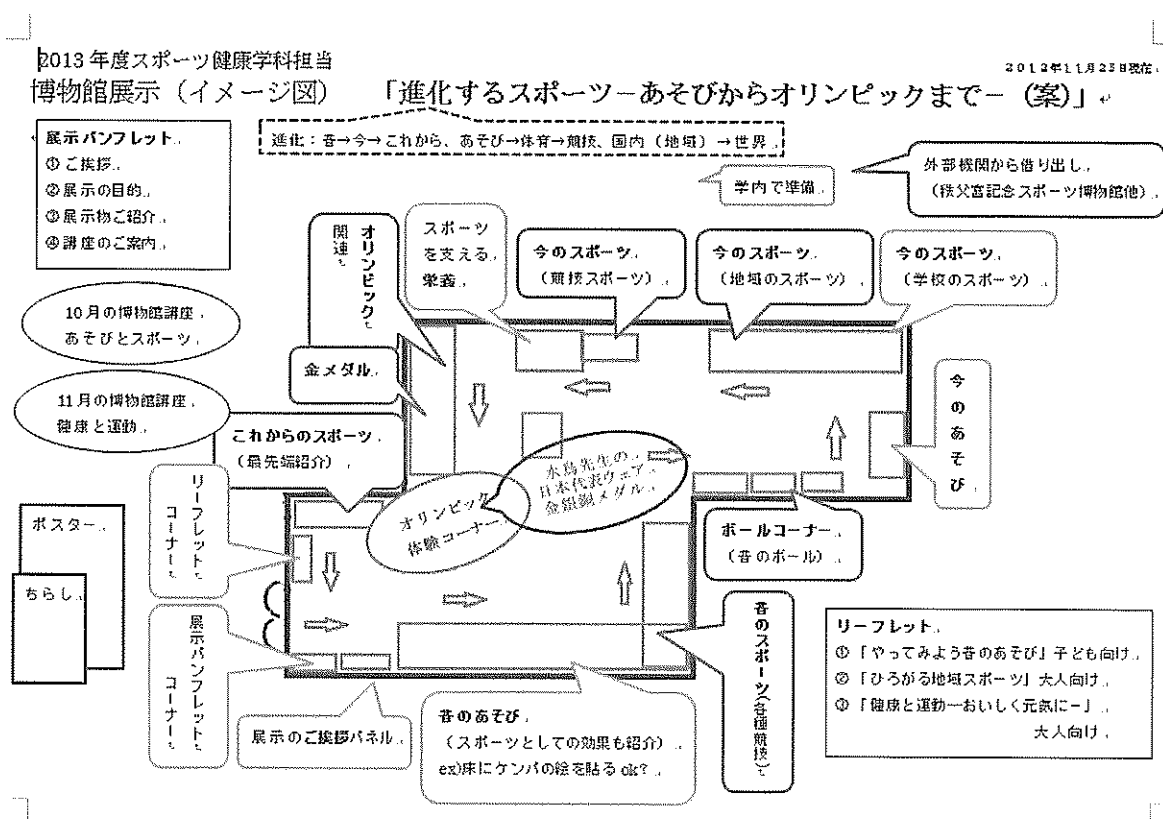


図1 企画当初のレイアウト

3. 展示品確保活動

大きなテーマや展示の方向性は決まったものの、それぞれのパートに、具体的に何をどれぐらい展示するのかを決めることは容易ではなかった。特に、スポーツに関して自前の展示資料を持たない中、外部から展示に足る資料を確保できるかどうか、見通しが立つまで担当者は大きな不安を抱えることとなった。それだけに、以下にあげる各機関から協力を

得られることになった際には、言葉に尽くせない有難さを感じた。

また、実際の交渉を通して、本学の博物館を熟知し、相手機関の信頼を得ることのできる専門性をもった博物館担当者の重要性も思い知ることとなった。それは、どの機関にとっても、重要な資料を長期間貸し出すことを考えれば当然のことである。本学が、その資料を安心して託せる貸し出し先であることを

確信してもらったからこそ、今回の展示は実現したと言っても過言ではない。今回の試みは、機関間連携における「人」の重要性を再認識する貴重な機会ともなった。

＜今回、展示にご協力いただいた主な機関・個人＞

①オリンピック関連資料 秩父宮記念スポーツ博物館

秩父宮記念スポーツ博物館は、国内でも最大級のスポーツ関連展示を行っており、そのHPからも魅力的な展示内容を垣間見ることができた。オリンピック関連の展示品をどう確保するかについては、早い段階からこの秩父宮記念スポーツ博物館に注目し、12月には水鳥を窓口に展示品借用の可能性を打診した。結果として非常に有難いことに、建替え時期が迫る国立競技場の中に位置する秩父宮記念スポーツ博物館から、概ね了承の返事をいただくこととなった。翌年1月末には、筆者らが上京し、全館の見学はもちろん、展示候補資料の写真を撮らせていただいた。

最終的な借用資料の確定は、7月に再度本学博物館担当者と中道が上京し、本学博物館の展示・保管環境や運搬に関する博物館間の専門的事象を確認してもらうことで、「トーチ」「参加メダル」「マスコット」「ユニフォーム」「表彰台」「体験用 砲丸・盤」など約50点の借用について、正式に了承を得ることができた。

②オリンピック関連資料 ミズノ スポーツロロジーギャラリー

今回の展示で、我々が注目していたもう1つのスポーツ関連博物館が、大阪南港のミズ

ノ スポーツロロジーギャラリーである。この博物館は、本学と同じ関西地区にあり、オリンピックに様々な製品を提供しているミズノ株式会社ならではの資料を有する。その中から、より現代に近いオリンピックに関わる資料を中心に、借用を打診した。その結果、より現代に近いオリンピックの選手用ユニフォームと、ミズノの最新スポーツ用品の展示及び体験コーナーへの協力を了承していただけた。特に、ミズノ スポーツロロジーギャラリーに展示されていて、どうしても本学の博物館でも展示したかった「野球ボールの構造パネル」や「説明パネル」については、別に本学のために作成して下さるなど、数々のご配慮もいただいた。

③蹴鞠装束と鞠一式 蹴鞠保存会（京都）

スポーツの進化のテーマから、昔のスポーツとして、ぜひ蹴鞠装束と鞠の実物を展示したかった。近隣でご提供いただける先を探したが見つからず、インターネットで情報収集した結果、京都の蹴鞠保存会代表とつながることができた。実際に展示する際の人形への着せ付けから展示終了後の引き取りまでをご協力いただいたことで、間近で見ることが難しい本物の蹴鞠装束と鞠を見学者に見てもらうことができた。

④あん馬の進化 写真パネル

体操のあん馬の進化を実感してもらう貴重な資料として、スポーツ健康学科三木伸吾講師の恩師島根大学名誉教授渡辺悦男先生より、ドイツのヤーン博物館が所蔵する世界最古のあん馬の写真をご提供いただいた。このあん

馬は、現在のものと異なり、馬の身体に近い形状で尻尾までついている非常に珍しいものであった。その最古のあん馬に続き、秩父宮記念スポーツ博物館所蔵の1936年ベルリンオリンピック時のあん馬の写真を。さらにその後の変化として、セノー株式会社から提供していただいた1964年東京オリンピックと最新のあん馬の写真を提示することができた。結果として見学者は、あん馬が、まさに馬の形から現代の形へ変化していく進化のプロセスを実感できることとなった。

⑤オリンピック関連資料 本学ゆかりの選手

本学には、3名のオリンピックゆかりの選手が存在する。本学教授であった1928年ロサンゼルスオリンピック槍投げ選手の眞保正子先生、本学学生2006年トリノオリンピックハーフパイプ選手伏見知加子さん、そして前述の金メダリスト水鳥である。ぜひともそのコーナーをということで、眞保正子先生の資料は眞保先生の後輩光田美幸名誉教授を通じて日本女子体育大学同窓会松徳会より。伏見さんの資料は同じく恩師の安田正純名誉教授を通じてご本人より提供していただいた。水鳥も実家より、金メダル・ユニフォーム・パネルを用意し、一部は体験できるよう提供した。

⑥鳥獣戯画

本学図書館が所蔵する、鳥獣戯画（複製）を展示用に提供してもらった。部分的にはよく知られている動物たちの様々な遊びを、巻物として見てもらうことができた。

⑦その他の展示資料 個人

1964年東京オリンピックの時に聖火をリレーした人に配られたポスターを提供して下さった安田正純名誉教授をはじめ、アーチェリー一式・和弓衣装など、学内関係者からも多くの協力を得ることとなった。

⑧リーフレット（「昔のあそび」・「あそびからスポーツ」・「オリンピックを知ろう」）

今回は、見学者に自由に持ち帰ってもらえるよう3種類のリーフレット「昔のあそび」「あそびからスポーツ」「オリンピックを知ろう」を、スポーツ学科教員亀井安子教授・三木伸吾講師・杉山誠司教授で分担・作成した。

以上のように、非常に多くの機関と個人の協力なしには、今回の展示資料は揃わなかった。こうした展示を行う際には、担当者のみならず学科としても、展示資料につながる人的ネットワークをどれぐらいもっているかが重要であることがわかった。また、ネットワークをもたない場合でも、諦めずに情報収集に励み、提供してもらいたい資料を所蔵している先がわかれば、まずは連絡してみることも重要であると感じた。

⑨運搬と展示業務

主な展示資料の運搬と全ての展示は、元興寺文化財研究所が担当してくださり、本学博物館担当者との協力で、非常にインパクトのある魅力的な展示が完成した。

<広報等でご協力ください機関>

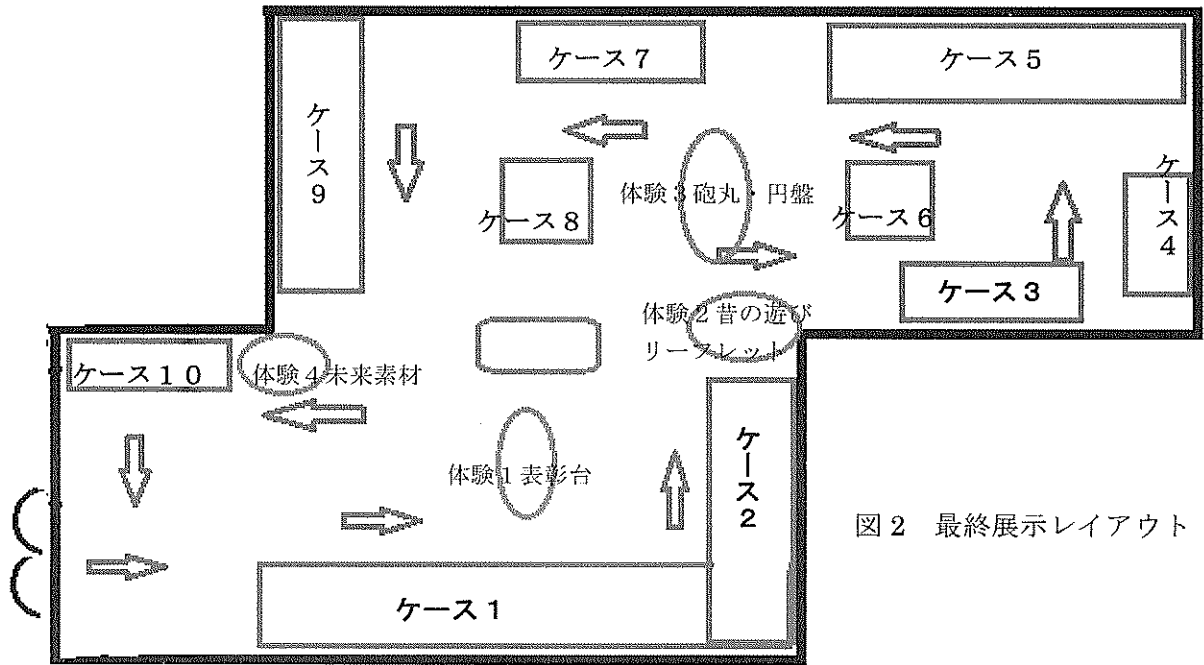
大阪府営錦織公園の指定管理者みどり会には、小学校誘致や子ども達に来てもらうため、公園情報の提供や遠足の下見に来る学校関係者への広報、開館期間中の「あそび」企画など、様々なご協力をいただいた。

4. 展示資料リストと写真

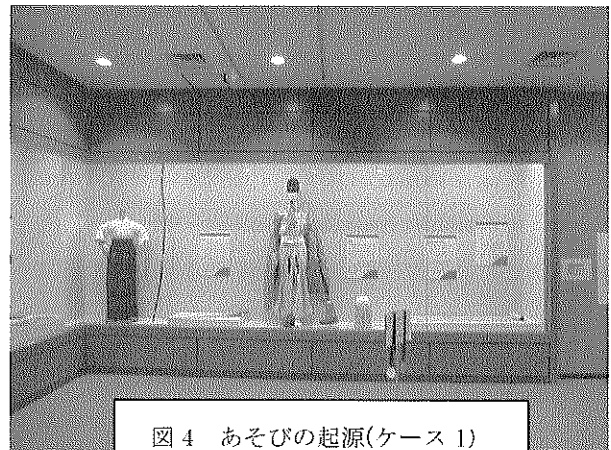
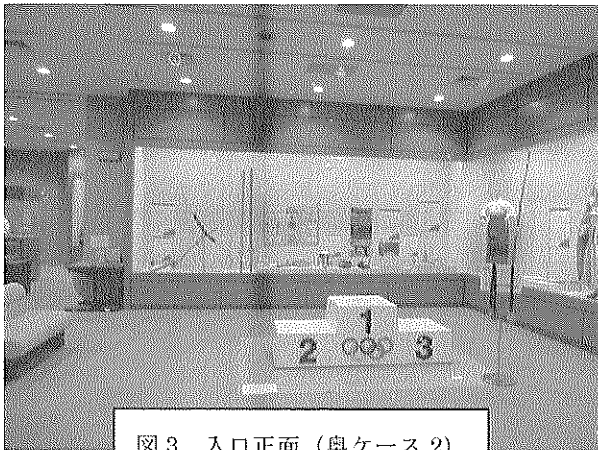
表1 展示資料リスト (敬称略)

コーナー名	展示位置	資料名	年代他	提供機関・個人
あそび・スポーツ	ケース1 あそびの起源	鳥獣戯画(複製)	12世紀—13世紀	大阪大谷大学図書館所蔵
		蹴鞠装束と鞠	600年代に仏教と共に日本へ	蹴鞠保存会
		和弓・矢と装束	現代	個人蔵
	ケース2 あそび・スポーツ 昔〜今	古代オリンピック レスリング(バンクラティオン)	B.C.300年ごろ フィレンツェのウフィツィ美術館所蔵(模造品)	個人蔵
		カ士埴輪	原山古墳出土(模造品):5世紀末(古墳時代中期末)から6世紀初	個人蔵
		明治の浮世絵「天覧相撲 小柳対若湊」	1891年 幾英 画	個人蔵
		昔の遊び(人形 相撲)	現代	個人蔵
		世界最古のあん馬(写真)	1812年(ドイツ ヤーン博物館所蔵)	島根大学名誉教授渡辺悦男先生
		戦前のオリンピック あん馬(写真)	1936年ベルリンオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館(所蔵)
		東京オリンピック あん馬(写真)	1964年東京オリンピック	セノ株式会社
		最新のあん馬(写真)	現代	セノ株式会社
		テニスラケット	大正	個人蔵
		第1回大阪府少年野球大会ポスター	昭和(戦後)	個人蔵
		戦前グローブ(布製)	昭和(戦前)	個人蔵
		戦後グローブ(布製)	昭和(戦後)	個人蔵
		現代子ども用 グローブ バット	現代	個人蔵
		野球ボールの構造	2013年	ミズノ株式会社
		昔の遊び(人形 ピッチャー)	現代	個人蔵
		鉄製ベイゴマ(2点)	昭和(戦後)	個人蔵
		昭和 メンコ	昭和	個人蔵
		昭和 おはじき	昭和	個人蔵
		竹馬	現代	スポーツ健康学科
		昔の遊び(人形 なわとび)	現代	個人蔵
		運動会用地下足袋	昭和(戦後)	個人蔵
		ニュースポーツ ジャベリック	現代	スポーツ健康学科
		ニュースポーツ インディアカ	現代	スポーツ健康学科
		アーチェリー弓・矢	現代	個人蔵
	体験コーナー2	体験用 メンコ	昭和	個人蔵
		体験用 おはじき	現代	スポーツ健康学科
		体験用 お手玉	現代	スポーツ健康学科
	リーフレット	リーフレット むかしのあそび	現代	スポーツ健康学科(亀井)
		リーフレット あそびとスポーツの動き	現代	スポーツ健康学科(三木)
		リーフレット オリンピックを知ろう	現代	スポーツ健康学科(杉山)
近代のオリンピック	ケース3 ポスター	歴代オリンピックポスター	1964年 東京オリンピック トーチランナー記念品	安田正純名誉教授
	ケース4 参加メダル・マスコット	参加メダル	1896年アテネオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1996年ソウルオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1912年ストックホルムオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1920年アントワープオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1928年アムステルダムオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1936年ベルリンオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1996年アトランタオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1952年ヘルシンキオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1960年ローマオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1968年メキシコオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1976年モントリオールオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	1992年バルセロナオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		参加メダル	2000年シドニーオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		マスコット バルディ	1972年ミュンヘンオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		マスコット アミック	1976年モントリオールオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		マスコット ミーシャ	1980年モスクワオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		マスコット イーグルサム	1984年ロサンゼルスオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		マスコット ホドリ	1988年ソウルオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		マスコット コビー	1992年バルセロナオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		マスコット イジイ	1996年アトランタオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館

コーナー名	展示位置	資料名	年代他	提供機関・個人
近代のオリンピック	ケース5 聖火トーチ・ユニフォーム	聖火トーチホルダー	1936年ベルリンオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1960ローマオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1968年メキシコオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1968年メキシコオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1972年ミュンヘンオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1976年モントリオールオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1980年モスクワオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1984年ロサンゼルスオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1988年ソウルオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1992年バルセロナオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	1996年アトランタオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	2000年シドニーオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	2004年アテネオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	2008年北京オリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		聖火トーチ	2012年ロンドンオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		体操ユニフォーム(ベラ・チャスラフスカ)	1964年東京オリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		陸上ユニフォーム(飯島秀雄)	1968年メキシコオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		体操ユニフォーム(コマネチサイン入り)	1976年モントリオールオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		バスケットボールユニフォーム	1956年メルボルンオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		ハンマー投げユニフォーム(室伏広治)	2004年アテネオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
	ケース6 サッカー オリンピック3位	サッカーボール	1968年メキシコオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		サッカーユニフォーム	1968年メキシコオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
		サッカー銅メダル	1968年メキシコオリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
	体験コーナー1	体験用 表彰台	1964年東京オリンピック	秩父宮記念スポーツ博物館
	体験コーナー3	体験用 砲丸投げ 砲丸	現代	秩父宮記念スポーツ博物館
		体験用 円盤投げ 円盤(男性用)	現代	秩父宮記念スポーツ博物館
		体験用 円盤投げ 円盤(女性用)	現代	秩父宮記念スポーツ博物館
本学ゆかりの オリンピック選 手	ケース7 真保先生・伏見さん	真保先生 写真	昭和(戦後)	秩父宮記念スポーツ博物館
		真保先生 やり投げ4位(日本新記録) メダル	1928年 ロサンゼルスオリンピック	日本女子体育大学同窓会松徳会
		真保先生 参加メダル	1928年 ロサンゼルスオリンピック	日本女子体育大学同窓会松徳会
		真保先生 記念メダル	1928年 ロサンゼルスオリンピック	日本女子体育大学同窓会松徳会
		真保先生関連出版物 2点	1983年出版 2013年出版	光田美幸名誉教授
		伏見知何子さん ハーフパイプ12位 写真	2006年トリノオリンピック	伏見知加子さん
		伏見知何子さん ハーフパイプ12位 ビブ	2006年トリノオリンピック	伏見知加子さん
	ケース8 水鳥寿思	水鳥寿思 オリンピック ユニフォーム	2004年アテネオリンピック	水鳥寿思
		水鳥寿思 オリンピックつり輪用プロテクタ	2004年アテネオリンピック	水鳥寿思
		水鳥寿思 男子体操団体金メダル	2004年アテネオリンピック	水鳥寿思
	団体見学 特別体験用	体験用アテネオリンピック ウェア	2004年アテネオリンピック	水鳥寿思
		体験用メダル 金・銀・銅	2012年ロンドンオリンピック	個人蔵
現代のオリン ピック	ケース9 オリンピック公式ユニ フォーム	オフィシャルスポーツウェア	2004年アテネオリンピック	ミズノ株式会社
		スピードスケートユニフォーム	2006年トリノオリンピック	ミズノ株式会社
		野球ユニフォーム	2008年ベキンオリンピック	ミズノ株式会社
		スキージャンプユニフォーム	2010年バンクーバーオリンピック	ミズノ株式会社
		バレーボール(女子)ユニフォーム	2012年ロンドンオリンピック	ミズノ株式会社
これからのス ポーツ	ケース10 最新のスポーツ用品	バット	2013年	ミズノ株式会社
		野球用シューズ	2013年	ミズノ株式会社
		陸上シューズ	2013年	ミズノ株式会社
		サッカーシューズ	2013年	ミズノ株式会社
	体験コーナー4	体験用 汗をかくと発熱する素材	2013年	ミズノ株式会社



展示状況記録（博物館提供）



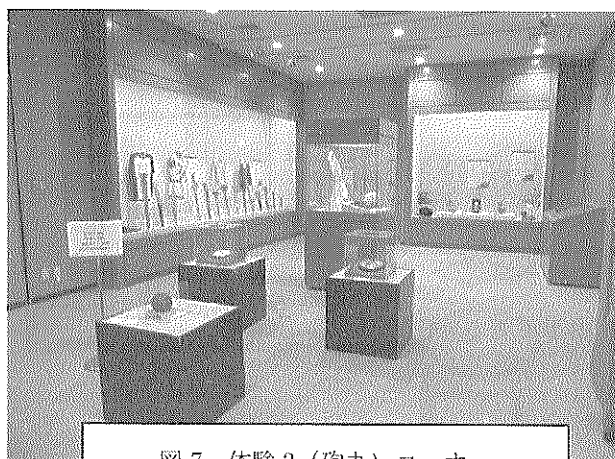


図7 体験3(砲丸)コーナー

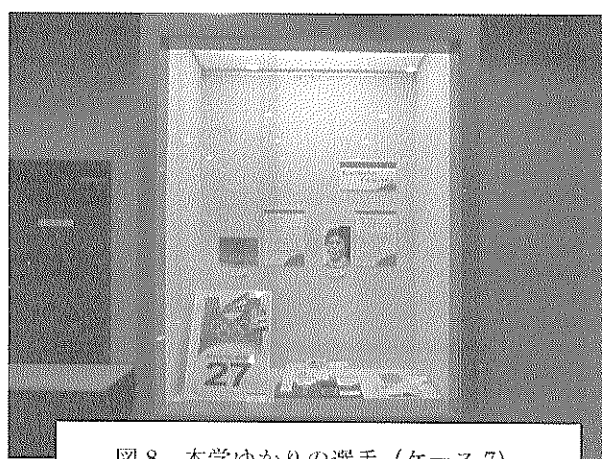


図8 本学ゆかりの選手(ケース7)



図9 本学ゆかりの選手 水鳥(ケース8)

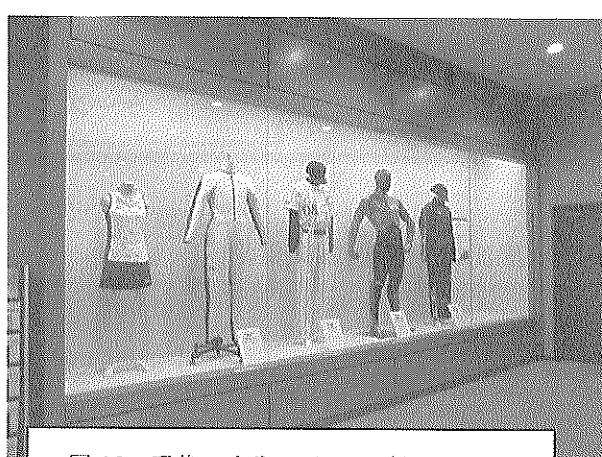


図10 現代のオリンピック(ケース9)



図11 体験4 新素材コーナー

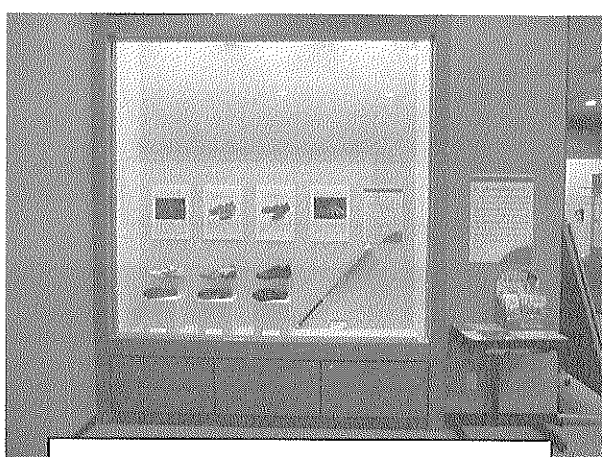


図12 これからのスポーツ(ケース10)

5. 博物館講座

本学の博物館では、本学の博物館展示期間中に、展示に関連する博物館講座が開催することが恒例となっている。今回は、博物館提

供講座として10月5日(土)14:00から「子どもの遊びとスポーツ」をテーマに、奈良佐保短期大学准教授村田トオル先生に、スポーツ健康学会提供講座として11月4日(祝)

13:00 から「オリンピック“モノ”語りー資料が語るドラマ」をテーマに秩父宮記念スポーツ博物館学芸員の**新名佐知子**さんにご講演をいただいた。

村田トオル先生は、現代の子ども達が体験できなくなっている「遊び」を、地域にある場を活かして、子ども達に提供される中で、子ども達が「できない」を「できる」にしていく力の重要性について、実際の活動風景を提示しながらお話ししてくださった。

新名佐知子さんは、9月8日の2020年東京オリンピック誘致決定以来、様々な取材が

秩父宮記念スポーツ博物館に殺到する超多忙な中、もうすぐ取り壊される国立競技場や博物館展示資料に秘められたエピソードを、たくさんの画像を使って語ってくださった。

6. 広報活動

冒頭でも述べたように、今回の展示の広報活用は、スポーツ健康学科にとって非常に重要であったので、博物館が用意する通常のチラシ・ポスターとは別に、学科独自のチラシを作成し（図13）、秋の展示に向けて、春から夏にかけて、独自の広報活動を展開した。



図13 学科作成チラシ

4月には、大学に隣接する大阪府立錦織公園を指定管理するみどり会に連携をお願いし、錦織公園へ遠足に来る小学校のエリアを中心に、富田林市・河内長野市・大阪狭山市・羽曳野市・松原市・堺市・和泉市・大阪市南部など計200校の各小学校遠足担当者宛に、このチラシに錦織公園の案内を添えて発送した。

さらに、錦織公園に遠足の下見に来られる先生方に渡していただく広報セットを、錦織公園に預かっていただき、上記以外のエリアもカバーする努力を行った。

春から夏にかけては、このチラシを入試広報のため高校を訪問する担当者にも持参してもらい、高校にもスポーツ健康学科企画の博

博物館展示をアピールした。博物館展示が近づく夏には、近隣地域の自治会を通じて、チラシの配布を行なった。また近隣小学校・幼稚園には直接持参し、見学に来ていただくようお願いした。

博物館からも、従来どおりチラシ・ポスターの作成と博物館だよりに掲載内容を紹介していただき、通常の発送範囲にスポーツ健康学科がお願いする機関・団体を加えて発送してもらった。

オリンピック関連の展示については、例えその広報の一端を担う事業であったとしても、五輪の使用も含めて、全て日本オリンピック委員会の許可を必要とする。1月上旬時に、日本オリンピック委員会へも挨拶と展示概要について打診し、後日了承を得た。その後に発生した変更や追加についても、その都度伺い了承を得た。

非常に有難いことに秋季特別展直前の9月8日に2020年東京オリンピックの誘致が成功し、オリンピックがマスコミ等でさかんに取り上げられることとなった。東京の盛り上がりが大阪にも伝わる中、9月27日に博物館展示をスタートすることができた。マスコミには、地域のコミュニティ誌に開催直前と開催中の2回記事として取りあげてもらったり、大手新聞社にも掲載されるなど、状況としては非常に恵まれた博物館展示となった。

反省点は、4月すぐにとりかかった小学校の遠足誘致で結果を出せなかったことである。後になって、小学校の場合は、4月の始業式が始まる前に、その年度の主だった行事内容が決まるということを知った。次に小学校などをターゲットにする場合は、前年度の予算

でチラシを用意し、3月の終わりには発送を終える必要がある。

7. 博物館の全面的バックアップ

今回の一連のプロセスを通して、本来であれば博物館だけで企画・運営する方がスムーズであるにも関わらず、大学の各学部学科にその企画を委ね、その特色を活用する場を提供してくれている博物館の度量の大きさを感じた。おそらく、今回の企画初期の段階で、博物館関係者は少なからぬ疑問や不安をもったであろうが、途中でストップをかけることなく、我々の好きなように展示案を作成してくれた。そのお蔭で、前述の展示品確保の大変さも、乗り越えることができたと思う。

まちづくりを推進していく際の要素として「よそ者」「ばか者」「若者」の重要性が言われるが、まさに博物館展示の経験のない我々は、目指す展示を実現したい一心で、各機関の扉をたたいた。その結果、内外の各機関担当者に非常なご負担をおかけした。せめて今回の連携が、これまで他機関と連携したことがなかった機関にとって、今後の新たな連携への糸口につながるなど、本学だけに留まらない結果につながることを願う。

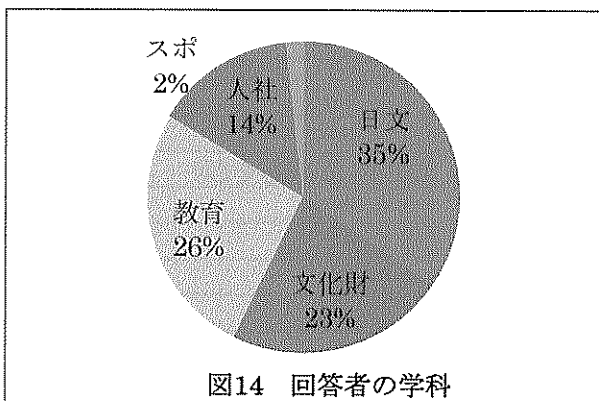
8. 見学者アンケートの結果

以上のように、多くの機関・方々のご協力のお蔭で実現できた博物館展示であるが、実際に博物館を見学した人達は、どう感じたのであろうか。中道の「生涯学習概論B」(1回生担当)受講者158名に記入を依頼し、提出された110名分の結果を報告する。

生涯学習概論Bは、司書・学芸員・社会教

育主事の課程を履修する学生を意識し、生涯学習社会と各専門性の土台となる学習者特性の理解を中心とする科目である。近年 MLAK 連携として、博物館 (Museum)、図書館 (Library)、文書館 (Archives)、公民館 (Kominkan) の連携の在り方が問われている。どんな資格を目指すにしても他機関の現状を知ることは重要であることから、履修者全員に博物館展示を体験しに行き、その結果を提出するよう指示した。

提出した学生は、日本語日本文学科(日文)38 名、文化財学科(文化財)25 名、教育学科(教育)29 名、人間社会学科(人社)16 名、スポーツ健康学科(スポ)2 名であり、図 14 の通り、スポーツ健康学科のみ少ないものの、残りの学科は比較的バランスがとれている。



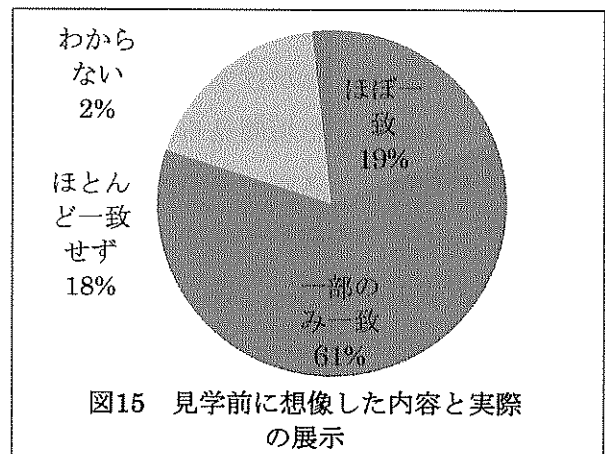
スポーツ健康学科の少なさは、健康運動指導士など専門に関連した資格が他に複数用意されていることと関連すると思われる。

記述用紙は、1.見学前に予想した展示内容(自由記述)、2.実際に見学した中のベスト3(理由も記述)・3.見学を通して気づいたこと学んだこと(記述)の3点について記入してもらった。

8-1.見学前に予想した展示内容(自由記述)

実際の展示を目にする前、学生はどんな展

示内容を予想したのか自由に記述してもらった。今回は、その記述内容のキーワードを中心に分析した。



学生の記述用紙には、博物館展示のテーマや開館日時などの情報と共に、会場の簡単なコーナーレイアウトを載せておいた。また学内には、年度始めから博物館展示ポスターやチラシがあちらこちらに掲示されていた。それにもかかわらず、あそび・スポーツ・オリンピックといった3つの主要キーワードを用いて、展示内容と「ほぼ一致」して予測していたのは21名で、2割に満たなかった。3つのキーワードの一部のみ一致していたのは67名で最も多く全体の過半数を占めた。中でも、最も多く記述されていたキーワードは、「オリンピック」であった。そのうち、オリンピックのみを記述していた学生は27名にのぼる。メインテーマは、「進化するスポーツ」であったが、サブタイトルの「オリンピック」が「スポーツ」よりも多かったのは、前述のように社会全体がオリンピック誘致成功で盛り上がっていたことの影響が大きいと思われる。

ほとんど一致しなかったのは20名で、その多くが「狭い」「展示は少ない」「本物はない」「堅苦しい」「写真だけ」「スポーツに興味ない」「楽しくない」など、博物館展示へのマイナス

イメージを記述していた。このグループの多くは、授業で渡された記述用紙をうめるため、不本意ながら仕方なく博物館展示を見に行ったとも言える。通常の実験肢ではなく自由記述にしたことで、思いもかけず、博物館展示に対する学生達の本音を垣間見る形になった。

これらの結果から、「スポーツの進化 あそびからオリンピック」のテーマで、具体的な展示内容を想定することは、必ずしも簡単ではなかったことがわかった。テーマ設定および表現については、できるだけ展示内容をイメージできるようもっと工夫すべきであった。また、チラシやポスターに、「博物館」のマイ

ナスイメージをできるだけ払拭するような工夫や情報を入れることも、新たな入館者確保のためには重要であることがわかった。

8-2.実際に見学した中のベスト3（理由も記述）

この項目も、見学者それぞれにとって何が残ったかを、選択肢を限定せずに聞いたかったので、最も印象に残ったもののベスト3をその理由と共に、自由に記述する形式をとった。その結果下記のように、特定の展示コーナーや資料に集中するのではなく、非常に多くの項目が上がった。

表2 ベスト1・2・3の結果

ベスト1		ベスト2		ベスト3	
トーチ	25	トーチ	23	トーチ	16
表彰台	23	体験(砲丸)	20	体験(砲丸)	11
体験(砲丸)	6	参加メダル	9	現代のオリンピック	10
体験(昔の遊び)	6	水鳥先生	9	マスコット	8
未来のスポーツ	6	昔のスポーツ	5	サッカー	6
蹴鞠	5	アーチェリー	4	体験(昔のあそび)	6
鳥獣戯画	5	蹴鞠	4	水鳥先生	6
マスコット	5	現代のオリンピック	4	参加メダル	4
水鳥先生	4	表彰台	3	表彰台	4
参加メダル	3	マスコット	3	本学ゆかり	4
昔のあそび	3	未来のスポーツ	3	蹴鞠	4
和弓	3	和弓	3	昔のスポーツ	4
あん馬	2	あそび	3	和弓	4
サッカー	2	近代オリンピック	3	近代オリンピック	3
ボールパネル	2	サッカー	3	アーチェリー	2
本学ゆかり	2	あん馬	2	あそび	2
昔のスポーツ	2	ボールパネル	2	あん馬	2
ポスタ	1	ポスタ	2	ボールパネル	2
相撲	1	あそびのリーフレット	1	未来のスポーツ	2
アーチェリー	1	運動会用の地下足袋	1	昔のあそび	2
あそび	1	体験(昔の遊び)	1	ユニフォーム	2
格闘技	1	鳥獣戯画	1	生涯スポーツ	2
近代のオリンピック	1	本学ゆかり	1	鳥獣戯画	1
計	110	計	110	紅陶馬俑	1
				第1回大阪少年野球大会	1
				ポスタ	1
				計	110

ベスト 1・2・3 全てのトップは、「トーチ」であった。合計すると提出者の過半数 64 名が、ベスト 1・2・3 のいずれかに「トーチ」をあげている。聖火リレーのことは知っていても、それを支えるトーチを実際に目にする機会は少ない。オリンピックによって、大きさもデザインも異なるトーチを一度に 15 点、間近に見比べることができたことは、様々な驚きと共に強い印象を残すこととなった。秩父宮記念スポーツ博物館でも、このトーチは、入口からすぐに目に入るケースの中に飾られていた。今回の展示で、この全てを提供していただいたことに、改めて感謝したい。

ベスト 1 の 2 位は、「表彰台」であった。東京オリンピックの表彰台は、入口の真正面に配置された。おそらく、多くの入館者がこの配置に驚いたと思う。この表彰台には、実際に乗ることができた。さらに学科スタッフのアイデアで金・銀・銅メダルの首飾りが用意され、見学者はメダルを首にかけて写真撮影することもできた。見るだけではなく体験できる表彰台に、学生はもちろん外部からの見学者も、楽しそうに乗ってその高さを体験したり、写真を撮り合ったりされていた。

この場所には元々、博物館が所蔵する大きな紅陶馬俑のケースがあり、過去の特別展でも動かせなかったと聞いていたので、入口正面にスポーツの展示とは関連しないケースがあることはやむを得ないと諦めていた。しかし、博物館担当者は、今回の展示のためにこの大型ケースを入口横へ移動させ、入館時に心を捉える「表彰台」配置を実現してくれた。この配慮が「表彰台」のこの結果につながったと思う。博物館担当者の配慮にも感謝したい。

ベスト 1 の 3 位は「体験（砲丸）」で、ベスト 1・2・3 全体を合わせると、前述の表彰台 30 名を超える 37 名が印象に残ったと記述している。このコーナーは、砲丸・男子円盤・女子円盤をプラスチックケースの穴から手を入れて持ち上げ、その重さを体験することができるもので、秩父宮記念スポーツ博物館見学時に筆者らも体験し、ぜひ本学でも体験できるようにとお借りした。見ているだけではわからない砲丸や円盤の重さの体験は、「選手のすごさを思い知った」という学生達の記述にもあるように、大きな学びをもたらしたことがわかる。

また、前述のように少ないながらも、学生はそれぞれの関心から、様々な展示資料をベスト 3 に位置づけてくれていた。収集に苦労した側にとって、たった 1 人でも印象に残った学生がいることを知れたことは、うれしい限りであった。

8-3. 見学を通して気づいたこと学んだこと (自由記述)

最後は、今回の展示から学生は何に気づき、何を学んだかを聞く項目であった。ここでも学生は、自由にしかもていねいに記述してくれている。内容としては、ベスト 1・2・3 の記述では書ききれなかった個々の資料について、今回の展示全体、さらに博物館自体についての主に 3 つに分けられる。

個々の資料に関しては、自分が体験したことがある・体験しているスポーツに関する資料への関心が非常に強く、関連する本物の資料を見たことの感動と気づきを記述している学生が少なくなかった。また今回の展示で初

めて、本学にオリンピックで活躍した人がいることを知って驚く学生の記述もみられた。

展示全体についての記述は、本物を見ること・体験の重要性、展示資料の多さ、さらにその展示資料を提供してくれる機関との連携関係の重要性についての気づきと、「多種多様な展示品がジャンル別に配置されており、見学者を楽しませる工夫がされていた」「複数の体験コーナー子どもだけでなく大人も楽しめる」など企画や展示のあり方についての記述も見られた。中には「どこまで広がりをもたせるか、来館者の興味がどこにあるかを考えて展示することは大変だと思った。」と、今回我々が頭を悩ませたことをそのまま記述している学生もあり、驚かされた。また「日本発祥のスポーツについてもっと知りたかった」などの要望もあったが、「わかりやすい」「あきない」など概ね好評で、胸をなでおろした。

この項目で、認識を新たにさせられたのは、学生の博物館イメージ変容の記述であった。1番目の項目で、博物館に来る前の予想として、博物館は「狭い」「展示少ない」「本物はない」「堅苦しい」「写真だけ」「楽しくない」と思っている学生の存在を紹介したが、この項目では、「大したことないと思っていたが、実物で驚いた」「想像していた以上におもしろかった」「博物館は面白くないと思っていたが楽しかった」「初めて博物館へ行ったが、よかった。」「博物館は「昔のもの」のイメージが変わった」「博物館はスポーツの展示もできることがわかった」など、それまでの博物館イメージの変容を伝える表記が目立った。司書・学芸員・社会教育主事の課程を、これから学ぼうとする彼らの、それまでの博物館のマイナス

イメージを、今回の展示が変えるきっかけの1つになったとしたら、大学の博物館としても非常に大きな意味を持つのではないかと思われる。

9. 次回に向けて

企画者として、次回に向けての反省点は多々ある。ここではその主な点を3つあげる。

第1は、テーマの設定が大きすぎたことである。学生が事前に、テーマから展示内容をイメージしにくかった理由は、それぞれ大きな広がりをもつキーワード「あそび」「スポーツ」を、テーマの中に無造作にすえてしまったことが原因である。「スポーツ」のどの部分を取り上げて、進化とつなげるのか。「あそび」のどこに焦点を当てて、どうオリンピックへつなげるのか。わかっているようで、わかりにくいキーワードを複数使ったことで、結果的に中身を具体的にイメージしてもらうことから遠ざかってしまった。次にテーマを検討する際は、魅力的な中身を具体的に想像してもらえるようなテーマ設定が必要であると考ええる。

第2は、博物館展示に関わる基本的な重要事項について、担当者自身の事前学習が足りなかったことである。先に述べたように、学外との連携を実現するためには、いわゆる博物館関係者なら当然わかっていることが理解できていないと、たちまち信頼を失ってしまいかねない。実際に今回も、相手機関の不信から、資料の貸し出しがあやうく困難になる場面を作ってしまった。今回は、本学博物館担当者の支援で、何とか信頼を回復し貸し出しを受けることができたが、場合によっては、

企画を変更せざるをえないことにもなる。特に、本学博物館には担当者が1名しかいない。人的に厳しい状況の中で、博物館運営の実務をこなす担当者にできるだけ負担をかけないためにも、事前の学習は必要であった。

第3は、子ども向け広報活動の失敗である。小学校の誘致にかなりのエネルギーを注いだにも関わらず、1校も誘致できなかった。これは、事前に小学校の年間計画に関与するための情報収集ができていなかったことによる。8のアンケート結果で学生から「小さい子ども達も楽しめる」と評価される内容であっただけに、悔いが残る。次回は、ターゲットへの効果的な広報活動を実現するために、できるだけ早くていねいな情報収集を行いたい。

おわりに

約1年にわたる博物館展示との関わりを終えて、今思うことは、学内外のたくさんの機関・個人の皆さまが、よくぞご協力くださったということにつくる。皆さまのお蔭があったからこそ、スポーツ健康学科設立2年目にして、東京でしか見られない資料を始めとした「スポーツに関わる本物」との出会いを、本学の博物館を舞台に実現できた。このことに、心より御礼申し上げます。

最後に、博物館展示について基本的な知識がないまま、熱意だけで動きまわる私達を辛抱強く支援し、魅力的な展示の実現にご尽力いただいた本学博物館館長補佐竹谷俊夫准教授と博物館学芸員池田千尋さんに、心から感謝したい。

(なかみち あつこ 人間社会学部スポーツ健康学科教授 みずとり ひさし 人間社会学部スポーツ健康学科講師)

参考文献

眞保正子先生関連図書

勝馬勝子・村山茂代『二階堂を巣立った娘たち―戦前オリンピック選手編』不昧堂出版、2013

平林英子ほか『来し方の記5 新毎選書-8』信濃毎日新聞社、1983